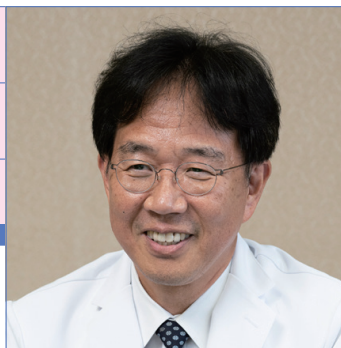


国立がん研究センター

困難ながんの治療に道を拓き、 「がんに負けない国へ。」



国立がん研究センター東病院
呼吸器外科 科長
坪井正博先生

国立がん研究センターは1962年の開設以来、60年にわたり日本のがん対策を牽引し、がん研究・がん医療をリードし続けている。がん種別の死因で最多の「肺がん」治療に取り組む同センター東病院の坪井正博先生に聞いた。

がんによる死因第一位にある「肺がん」。国立がん

研究センター東病院の坪井正博先生は、そんな肺がん治療の可能性を切り拓いてきたフロントランナーだ。

「がんを治したい、生きたいという患者さんの願いに応える方法を探し続けていく。そして困難ながんを克服するパッションを世代を超えてつないでいくことが、医療者の使命です」。坪井先生はこう力を込める。

国立がん研究センター東病院は、肺がん年間手術症例数が400例を超える日本屈指のハイポリウムセンターだ。坪井先生はそこで臨床のみならず、手術と薬物療法や放射線治療などを組み合わせた

新たな治療法の開発にも取り組んできた。「免疫チェックポイント阻害剤や分子標的薬な

どの革新的な薬剤が登場し、また小型のがんに対して、手術で切りとる範囲をより小さくするメリットが明らかになり、肺がん治療にさまざまな選択肢が生まれていきます。従来ならば諦めざるを得なかった進行がんでも、手術と薬、あるいは放射線の組み合わせで長期の生存を目指す時代になっているのです」

メスと薬の「二刀流」で 治療の可能性を広げる

現在は周術期（手術の前後期間）の研究に力を注ぎ、海外企業との共同研究にも取り組んでいる。最近の研究では、手術後に分子標的薬を投与することで生存率の向上を示した。

「例えば肺がんの2期、3期であっても、手術前後に適切に薬などを使うことで生存率が10〜30%程度改善することもあります。これからは、手術でがんをとり切れる場合には、メスと薬

の「二刀流」が、肺がん治療の主流になっていくでしょう」と坪井先生。

「国境を越えた先進的な研究開発の成果を日本中の患者さんに還元していきたい。また、日本の未来の医療を切り拓くという当センターの使命を果たすために、明日の医療を担う若手医師も育てていきたい」とさらに未来を見据える。

困難ながんの克服を目指して、その医療の可能性を広げ、さらには次世代育成のために、一人ひとりの寄付が力になる。

お問い合わせ



国立がん研究センター基金
The National Cancer Center Foundation

国立がん研究センター 寄付募集担当

☎03-3547-5333

メール: nccifu@ncc.go.jp

国立がん研究センター東病院 事務部寄付担当

☎04-7133-1111 (内線91460)

メール: kifu@east.ncc.go.jp

